

平成21年5月28日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530480

研究課題名（和文） 集団概念の文化的構築性：個人－集団関係の知覚

研究課題名（英文） Cultural construction of the concept of group：Perception of individual-group relationships.

研究代表者

杉森 伸吉 (SUGIMORI SHINKICHI)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：60266541

研究成果の概要：個人主義や集団主義の程度が異なる国について、日本とカナダの比較を中心に成員分布の認知を調べた。その結果、カナダよりも日本において集団サイズと好ましい成員の比率は連動することがわかった。また、引き続き児童を対象に、集団認知の違いを調べた。特に、集団への適応度が低い児童について、高い児童と対比した。その結果、集団への適合度が高い児童の方が、魚や人間が動くコンピュータグラフィックスを見たときの反応が、対象の人物や魚について集団適合的に記述する傾向が見られた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：社会心理学・実験社会心理学

キーワード：集団知覚，集団適応，グループ・ダイナミクス，集団サイズ，相互独立性・相互協調性

1. 研究開始当初の背景

対人知覚は社会心理学の中心的研究課題であるが、従来ここに関連する推論、理解、印象形成などの心理的プロセスは汎文化的、人類普遍的なものとして扱われてきた。しかし、近年の文化心理学的研究は、これらさまざまなプロセスはある当該の文化にある日常的

慣習や暗黙の意味付けの構造を反映しているという可能性を示唆してきている (Fiske, Kitayama, Markus, & Nisbett, 1998, *Handbook of Social Psychology*)。本研究では、このような可能性について、特に人の集団が知覚される際における文化的意味体系

の関与を検討する。欧米におけるこの分野の研究にみられる根本的仮定の一つに、社会的知覚の基本的ユニットは個人であるというものがある（この仮定は、集団知覚の研究において、相互作用がない複数の個人の情報を「集団成員」として提示する多くの社会的認知研究にも見ることができる）。

この視点からすると、グループとは、個人個人の集合であり、個人から派生する二次的ユニットであると考えられる。実際、近年のこの分野のレビューや実験（Hamilton & Sherman, 1996, *Psychological Review*; Crawford, Sherman, & Hamilton, 2002, *JPSJ*）は、このような仮定を用いることにより数多くのデータを説明できることを示している。しかし、これらの研究の大多数、ほとんどすべては欧米でなされたものである。したがって、ここで見いだされている心理プロセスの多くは、欧米における文化的意味や慣習の構造を背景にして存在しているものであるという可能性がある。

Allport, F. はかつて、「集団心の虚偽(group mind fallacy)」なる概念を用い、集団が存在するというのは幻想にすぎず、あるのは個々の成員の行動だけであると主張したが、このような主張は科学的命題ではなく、むしろ欧米文化に暗黙にある人間観を反映したものであると考えられる。事実、マルカスと北山の分析によれば、東洋にあつて、グループは心理的実在性を持つ。この可能性を示唆するデータは数少ないが、Ellsworth は、複数の魚の動画を見せるだけでも、東洋人は「魚の集団」、「魚の家族」を容易に知覚するが、アメリカ人は「個別の魚が複数いる」とあくまで個体中心に知覚し、集団として知覚することはないことを示している。杉森と北山は、先行する科研費（平成 12-14 年度）により魚や人、四角形が単独または集団でさ

まざまな動きをするコンピュータ・グラフィックス（CG）の開発をおこなった（このソフトは、海外にも類を見ないものであり、今後も様々な研究を生み出しうる）。そして、同じ日本人であっても、相互独立的自己観を持つということと同義の、個人主義的傾向が強い人ほど集団を個体の寄せ集めと見なす傾向があることを示した。

2. 研究の目的

(1) 集団内/集団外少数者の知覚と原因帰属
集団の中または外でさまざまな動きをする少数者のCGを提示したときに、集団に対する意味づけが異なるものは、異なったストーリーを作るであろう。具体的には、個人を社会的知覚の一次的ユニットと考えるものは、集団から独立した行動をおこなう個体を見ても、それはノーマルな行動であると見なすであろうが、集団を社会的知覚の一次的ユニットと考えるものは、多数派の集団と異なる動きをする少数者は変わり者である、という認知をおこなうであろう。さらに、少数者を単独者とした場合、国内にあつては、集団内に適切な自己定位が出来ぬ不登校児などの不適応児による単独者の知覚も検討できる。

(2) 集団サイズと成員タイプの関連性の知覚
日本人では「一般の集団では集団サイズが小さいほど、良い人が多い」などのサイズと関連した集団知覚が見いだされており、この傾向の日本と北米(カナダ)で比較をおこなうことで、集団サイズの文化的意味を検討する。とくに、実際のような集団における認知を検討することで、いままで検討されてこなかった集団知覚の側面を明らかにすることができるであろう。

3. 研究の方法

(1) 子ども集団での野外活動について観察し、複数の観察者で各子どもの集団適応度を評定した。その評定値と、子どもに魚や人が

集団行動や個人行動をおこなうコンピュータ・グラフィックス（CG）を提示したときに子どもたち自身に物語を生成させ、子どもたちが生成した物語やCGの評定値との関連を調べた。

（2）さまざまな集団サイズを提示し、それらを「好ましい成員」「好ましくない成員」の2通りに分ける場合と、「好ましい成員」「好ましくも、好ましくなくもない成員」「好ましくもない成員」の3通りに分ける場合で、成員構成比が集団サイズに応じてどのように変化するかを検討した。またこのとき、集団の種類も3種類に分けて、「集団一般」、「企業・会社」、「大学」の3通りの集団について回答を得た。

4. 研究成果

（1）子ども集団においては、相互作用における些細な刺激で人間関係が急変することも多い。したがって、どのような時点でデータ収集をおこなうかにより、客観的に見られる子どもの適応状態と、その時々での主観的な適応感とは異なるため、客観的な適応の程度とともに、主観的な適応度との関連を検討することも重要である。今回は探索的な試みとして、「単独で歩く個人」「集団の中で、1人だけ他の人と色違いの個人」などの刺激を提示して、それらの個人がどのように感じていると思うかを答えさせたところ、個人の知覚、ならびに個人－集団関係の知覚において、若干の関連性を見いだすことができたが、結果の分析ならびに解釈に関しては、さらに洗練する余地があると考えられる。CGを提示して、投影法的にプロトコルをとる方法に関しても、さまざまな交絡変数が関与しうるが、一般の心理尺度とくらべて、何をはかられているのかわかりにくいいため、社会的望ましさなどの影響を受けにくいというメリットもある。そのため、今後も心理尺度との関連を

見つつ、方法論としての安定化を目指すこととしたい。

（2） 集団の種類にかかわらず、日本では集団サイズが小さいほど好ましい成員が多く、それが集団サイズの増大に伴い、好ましい成員が減少し、好ましくない成員が増大する、という傾向が2タイプに成員を分けた場合は見られるとともに、3タイプに分けたときには、集団サイズの増大に伴い、好ましさが中性の成員比が増大する傾向が見られた。

いっぽう、ヨーロッパ系カナダ人では、予測通り集団サイズの大小に関わらず、いずれのタイプの成員構成比も一定であり、好ましい成員の方が好ましくない成員よりも比率が多いという判断であった。アジア系カナダ人に関しては、「大学」と「会社」に関して、ヨーロッパ系カナダ人と同様にフラットな結果となったが、「集団一般」に関しては日本に類似の結果で、途中の集団サイズで好ましい成員と好ましくない成員の比が入れ替わった。結果は予測と一致した。集団の種類に関わらず、日本人参加者では集団サイズと成員誘意性の構成比は連動しており、ヨーロッパ系カナダ人では連動していなかった。ヨーロッパ系カナダ人の結果は、数年前にD. L. Hamilton が本研究の追試をアメリカで行ったときも同様の結果であった。いっぽう、アジア系カナダ人に関しては、両者の中間的傾向が見られ、集団一般では日本と類似の結果で、大学や会社はヨーロッパ系カナダ人と同様の結果であった。

これらの結果は、日本・アジアや北米における個人集団関係の特徴について考察する上で、示唆的である。つまり、いわゆる相互独立的な文化にあつては、所属する集団のサイズが個人の行動に影響することはないと信じられているが、いわゆる相互協調的な文化にあつては、所属する集団のサイズに応じ

て、個人の振る舞い方も変化すると信じられていることを、これらの結果は示唆しているからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1件)

① 杉森伸吉 集団サイズと成員誘意性分布との共変認知における文化差, 日本社会心理学会第49回大会 2008.11.3, 鹿児島県民センター

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉森 伸吉(SUGIMORI SHINKICHI)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：60266541

(2)研究分担者

(3)連携研究者